

実践的な技術英語論文の<キソ>について

茨城大学 工学部 電気電子工学科 鈴木 健仁

1. 論文を<読み>⇔研究テーマを<解く>

◎ <文型>と<品詞>

- (1) S V(自動詞)
- (2) S V C(名・形だけ) S=Cである。
- (3) S V O(名詞(代名詞)だけ) S≠Oである。
- (4) S V O O O≠Oである。
- (5) S V O C <名><名> か <名><形>。OとCは主語(S)→述語(P)の関係、例外はない。

<名> S, C, O だけになる。 他動詞の O、前置詞の O

<形> Cになる。名詞を修飾。

<副> 名詞以外「すべて」修飾。

<動> Vになる。

◎ <形式 S>の直読

It is A 真 S.

「Aなのは真Sだ」

It is certain that he will succeed.

→ 確かなのは、彼が成功することだ。(彼が成功するのは確かなことだ。)

◎ SV0(長い)の直読

「SがVするのはOだ」

He plays tennis.

→ 彼がするのはテニスだ。(彼はテニスをする。)

◎ <関代>の直読

Anyone [who takes a bribe] will be punished.

接続詞をつけて代入

→誰でもワイロをもらえば罰せられる。

◎ <前>+<関>の直訳

He invented many things [by which our lives were changed].

代入

→彼はたくさんの事を発明した、それによって我々の生活は変わった。

◎ <部分否定>

Both of them are not correct. → それらの両方ともが正しいわけではない。

否+常に always, necessarily

全部 all, every, both

完全 completely, entirely, very, quite

多い many, much

◎ <完全否定>

Neither of them is correct.

それらのどちらも正しくない。

否+any

either (どちらもとも～でない。両方とも～でない。)

◎ <文頭 To—>の直読

→名詞には形容詞的にかからない。形容詞的に to 動詞を使う際には、絶対に<名>to do となる。

To converse with . . .

<名>用法 S(⇒V)

<副>用法 M(⇒SV)

◎ <文頭—ing>の直読(2つだけ)

Feeling . . . , one finds

S V

<動名> S(⇒V)

<分構> M(⇒SV)

◎ SV (that 省略可) 文

① 思考 ② 発音

◎ <同格名詞節>の理解

名 (that 文)

=

<同各> いかえ

① ~という<名>

② <名>、すなわち~ということ

③ <名>変形による理解 the fact that 文 → in fact 文

◎

A<弱> but B<強>

yet

however

nevertheless

◎ A, B

① 同格 A=B ② 並列 A≠B

◎ A; B

→ and, so, for(というのは), that is(言いえると)=that is to say

◎ A-B

→ 「すなわち」 (=言い換え)

◎ while の 3 意

① 「している間」

② 「・・・だ、一方～」 (whereas)

③ 「～だけれども」 (although)

◎

A as well as B A、言うまでもなく (もちろん) B も

<強> <弱>

◎ 譲歩逆接

may

of course

indeed

to be sure

(It is) ture

no doubt

A<弱>

but

yet

however

nevertheless

B<強>

2. 論文を<書く>

論文を書く際には<研究論文や報告書の書き方>の資料を必ず参照する。

◎ 英作文をする際、英語の論文を書く際の最も重要なポイント

1. 中学英語

書けない時、言葉としてでない時は、易し~~すぎ~~くする。

2. 語と語の決まった結びつきに注意

✗ a mistake

→ make

◎ 受動態は能動態でチェック

× I was waited by her.

× She waited me. → She waited for me.

他動詞??

自動詞

◎ 一般論を書く時(これは英作文、論文では受動態が多い。)

You(一番多い)～

One(かたい、ダメ)～

We(一般論では使わない。自分が研究に取り組む際に使う。)～

◎ ～にーがある。

There is	○ a restaurant	near my house. ←場所、必ず必要。
	× his apartment	
	× Ibaraki University	
	× the building	

There is・・・ これは不定なものに用い、特定なものには用いない。

◎ had better

これは命令。そうしないと困った、大変なことになるという含み。まず普通は使わない。

must はIの意思が含まれる。have to は中立的な意味合い。should が無難

◎ ～ので

英作文では「～ので」で as は使わないこと！ because か since が○

3. 国際会議で研究内容を<聞き、しゃべる>

Native でない以上、英語の勉強はきりが無いけど、やるしかない。

最終目標は、「研究」の内容を伝えて、「研究情報」を集め、「仕事」を成功させることで、「英語」を聞く、しゃべることが最終目標ではない。

国際会議などの実践で練習を積むのが一番の上達への道。

早口は絶対に NG! ゆっくりゆっくりしゃべる! 原稿を作って、ひたすら練習、練習!

山中先生のノーベル賞受賞講演での発表のようにゆっくり分かりやすく説明することが私達 Native でない人が目指すべき最初の(最大の)目標。

<http://www.nobelprize.org/mediaplayer/index.php?id=1866>

大変だけど、15分の発表! が終われば、短期留学のようで楽しい。

国際会議への出張は研究結果によるが、就活時、入社後の大きなチャンスへとつながっている。

町中で実際に英語を使ってみて、海外の文化を体験することは、私達の研究室の皆さんのように世界へ羽ばたくリーダー候補生は身につけておくべき素質としてとても重要。

先輩の今野君(日立オートモティブシステムズ株式会社、入社後すぐの夏よりイギリスへ数ヶ月間短期研修)の例。

昔より「芸事、習い事は身銭を切れ」との言葉も。

自費で語学学校に通ったり、NHK ラジオ講座(研究室で毎月教材、CD(Natalie)を購入)などを受講。時間をかければ、時間とともに、必ず少しずつでも上達する。

そもそもお茶室で<聞く、しゃべる>日本語も、言い間違えたりする・・・

ゆっくりゆっくり、恥ずかしがらずにしゃべって大丈夫。英語がへたっぴでも恥ずかしがらずにしゃべる、伝えること大事。だって日本語は Native なのだから恥ずかしくない。

ディスカッションをどンドンして、

自分の研究課題を解決したり、新しい研究アイデアを考えることが最も大事。

努力に勝る王道はないので、私達は常に勉強しなくてはならない。

参考文献

[1] 駿台予備校 英語科 蒲生範明講師講義資料

[2] 元駿台予備校 英語科 林慎市講師講義資料

[3] 博士時代の資料、国際会議時のトレーニング、

普段の先生からの談話などよりエッセンスを抽出

[4] 山中伸弥教授 ノーベル賞受賞記念講演 <http://www.nobelprize.org/mediaplayer/index.php?id=1866>